

‘You’ve come a long way’ — 橋本萬太郎さんのこと —

国 広 哲 弥

今から十数年前、まだ東大に在職していた頃の話である。ある時旧知のアメリカの言語学者 Charles Fillmore さんが何かの用事で日本にやってきた。かつて神田外語大の学長であった井上和子先生と私に会いたいということで、私の研究室に三人が集まった。その時にフィルモアさんが盛んに話してくれたことは、‘risk’ という動詞のコパス言語学的な分析のこと、亡くなる直前の橋本萬太郎さんを見舞った時の話であった。‘risk’ の話はその時はよく分からなかったが、のちに論文の形で発表され、その論文は神大の大学院で読んだ。その研究成果は、私が編集に参加したある英和辞典の中にしっかりと取り入れてある。

フィルモアさんの来訪の少し前に橋本萬太郎さんは胃がんのために五十台という若さで亡くなっていた。萬太郎さんと私は共通の師である服部四郎先生を通じて若い頃から知り合いであったが、同世代の言語学者の中で萬太郎さんは私のもっとも尊敬する人である。碩学で独創的、私など足元にも及ばないと言うもおこがましいほどである。この国際的な大言語学者を余りにも早く失ってしまったことは、日本の、否世界の言語学界の一大痛恨事であると言わねばならない。最近、萬太郎さんの論文集が出版されることを知り、さもありなんと喜んでいる。

さて、フィルモアさんと萬太郎さんはオハイオ州立大学時代以来の親友であった。萬太郎さんが余命幾ばくも無いと聞いてフィルモアさんはアメリカから見舞いに駆けつけた。その時萬太郎さんは、

‘You’ve come a long way.’

と言ったと、フィルモアさんは繰り返し語った。私も井上先生もただ黙して聞くのみであった。こ

れからは私の無知をさらけ出す話になるのであるが、これを聞いた時、「遠いところをはるばるよく来てくれたね」という文字通りの意味にとって、それ以上のことは考えなかった。しかし今にして思うと、ひょっとすると二人の親友はこの言葉に何かほかのニュアンスを込めていたのではないかという疑問が生じるのである。それというのも、ある日『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』の ‘way’ の項を見ていたら、イディオムとして ‘You’ve come a long way.’ という句が出ていて、これは「君は大物になった」という意味であり、アメリカのタバコ Virginia Slims の標語であると説明してあったのである。フィルモアさんが私たちの前で何度も感慨深げにこの言葉を繰り返していた時、萬太郎さんはこの裏の意味を込めていたのだということを匂わせていたのではないだろうかと思うわけである。私たちもその事に気付いて、何らかの反応を示すべきではなかっただろうか、自分の無知を恥じている。今度フィルモアさんに会ったら尋ねてみたいと思っている。

橋本萬太郎さんの独創的な碩学ぶりは、その著書『言語類型地理論』（弘文堂）と『現代博言学—言語研究の最前線—』（大修館書店）を読めば分る。私は年来、一度読んだ本は再読しない人間なのであるが、この『現代博言学』だけは例外で、いつも暇があったら再読したいと狙っている。そこに見られる考察のしかた、博読に基づく思いもかけない情報の提供などの研究態度・方法が魅力的である。萬太郎さんは、若い頃、魯迅のような口ひげを生やしていたが、これも魅力的であった。口ひげの似合う日本人というのは非常に少ないが、萬太郎さんは例外的な存在であった。